



Title	ブラジルポルトガル語における接続法の用法について
Author(s)	河野, 彰
Citation	ブラジル研究. 2007, 2, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/98383">https://hdl.handle.net/11094/98383</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ブラジルポルトガル語における 接続法の用法について

河野 彰

## 1.

日本でポルトガル語を学び、その後、留学や仕事などでブラジルに渡り、一定期間、現地で生活するという経験をした人々からしばしば次のように指摘されることがある。「大学で先生に習ったポルトガル語はブラジルではちつとも役に立ちませんでしたよ」、「ブラジル人は教科書どおりには話しませんね」等々。このような感想を抱くのは、日本人だけではない。Azevedo (2005) の「序論」で、著者は以下のような興味深いエピソードを紹介している。

“The often sharp differences between the educated and vernacular or popular varieties of Brazilian Portuguese can also be a source of puzzlement for learners.... An American friend of mine who had studied Portuguese for over a year summed up this situation in a pithy message e-mailed a few weeks after arriving in Rio: ‘This language is going to kill me. I’m starting to hear things on TV and conversation with educated people, but when it comes to the street, *it’s like they speak a different language.*’ Nevertheless he survived, traveled around, met people, made friends, and is currently making plans to go back.”

(Azevedo 2005:3 - 4 イタリックは引用者)

このように、ブラジルポルトガル語における書き言葉(língua escrita)と話し言葉(língua falada)の相違は大きなものがある。我々のような外国人のポルトガル語学習者が教室内で学ぶポルトガル語は規範文法に則ったものであり、またブラジルで発行されている外国人学習者向けのポルトガル語入門書でも話し言葉の実態が十分に反映されているとは言い難い。また、いわゆる Vernacular Brazilian Portuguese の特徴として挙げられる項目は、必ずしも話し手の社会階層や教育レベルの相違にのみ起因するのではない。社会階層が上位の者や教育レベルの高い話し手であっても、状況や場面によっては同じような特徴を示すことがある。<sup>1</sup>

本稿の目的は、上述のような状況を考慮に入れつつ、ブラジルポルトガル語のとりわけ話し言葉における接続法の用法のうちごく一部を検討するものである。

## 2.

本稿で扱う言語事象は、たとえば Perini (1995:258) が指摘するような、(1a, 1b) とは異なる。<sup>2</sup>

(1a) Eu não creio que Selma fuma cachimbo.

(1b) Eu não creio que Selma fume cachimbo.

【私はセルマがパイプを吸うとは思わない】

規範文法に従えば接続法が出現する統語環境に直説法の動詞が出現することは、これまでしばしば指摘されてきた。初期の生成文法の枠組みでポルトガル語の接続法を扱った Azevedo (1976) は、(3)、(4) のような例を挙げて、両者は意味的には同一であるが、決して自由変異(free variation)ではなく、話し手の社会的属性や場面の形式さの度合いによることを指摘している。

(Azevedo 1976:50–53)<sup>3</sup>

(3) a. Eu quero que você fala com ele.

b. Se eu tinha dinheiro, eu ia lá.

c. É uma pena que você chegou atrasado.

- (4) a. Eu quero que você fale com ele.  
b. Se eu tivesse dinheiro eu ia [ ou iria] lá.  
c. É uma pena que você tenha chegado atrasado.

【(3)、(4)ともに a. 私は君に彼と話して欲しい b. もしお金があればそこへ行くのだが c. 君が遅れて来たのは残念だ】

さらに Azevedo (1989:867)では “Although the subjunctive is categorical in the standard, in spontaneous speech it appears conditioned by variable rules influenced by factors such as contextual formality and the speaker's educational level. ... Both in the vernacular and in colloquial educated speech, the present and imperfect subjunctive tend to be replaced by the present and imperfect indicative respectively ... Although the imperfect subjunctive is heard in stereotyped *if*-clauses ... , the imperfect indicative appears in both the protasis and the apodosis of *if*-clauses. ...”と述べている。また Azevedo (2005:241)では “... although the contrast between indicative and subjunctive ... holds well in monitored educated speech and in written styles, it may easily be neutralized in casual educated speech and in the vernacular. ... This suggests there is a tendency to use the indicative even in constructions where the matrix clause has a verb expressing volition, a belief, or a presupposition, ... There are also alternate constructions that make it possible to avoid the subjunctive, like the use of constructions with para + NP subject + infinitive... or with the infinitive. ...”と述べている。

ブラジル人インフォーマントの会話録音を分析した Wherritt (1978)は、ブラジルポルトガル語の話し言葉における接続法の用法について、次のようにまとめている。(Wherritt 1978:56 -59)

- “ 1. The use of mode may depend on the situation surrounding the speech act and the participants who are involved.
2. Sociological variables are likewise correlated with a speaker's usage.
3. Just as groups differ in their usage, an individual's competence may be distinct from the prescriptive norm, or individuals may differ from one

another in their competence.

4. In a given utterance a speaker's performance is not consonant with his competence. ... the nonprescriptive use of the indicative which occurs is simply an error that he would correct or avoid if he were monitoring his speech carefully."

次に、これまで概観してきた先行研究より例文を借用しながら、規範文法から逸脱した接続法の用例を整理してみよう。

### 3.

ブラジルポルトガル語の話し言葉における接続法の用法を以下のように分類してみる。

#### 1. 主語+動詞（願望、命令など）+従属節【名詞節】

(5) A gente quer que vocês vêm [st. venham] jantar lá em casa amanhã.

【明日、君たちに家に夕食に来てもらいたい】

(6) Duvido que você vai fazer [st. faça] ovo sem deixar derreter a gema, né?

【君が、黄身をくずさずに卵（料理）を作るとは思えない】

#### 2. SER +形容詞・名詞+従属節【名詞節】

(7=3c) É uma pena que você chegou atrasado.

【君が遅れて来たのは残念だ】

#### 3. ~名詞+従属節【関係節】

(8) Não tem nenhum que sobressai [st. sobressaia] assim.

【そのように目立つようなものは何もない】

(9) Qualquer pessoa que não conhecia [st. conhecesse] ele dizia que ele era estrangeiro.

【彼を知るような人は誰でも彼は外国人だと言うだろう】

4. 従属節の代わりに不定詞句を用いることで接続法の使用を避ける

- (10) O gerente disse para a gente ficar aqui. [st. O gerente disse que a gente ficasse aqui.]

【支配人は私たちにここに残るように言った（命じた）】

5. Se で導かれる条件節中で接続法未来の代わりに直説法現在

- (11) Se a senhora paga [st. pagar] um pouco mais nós limpamos (st. limpamos) a varanda também.

【もう少し払って下さるなら、私たちベランダも掃除しますよ】

6. Se で導かれる条件節中で接続法過去の代わりに直説法不完全過去  
(仮想文)

- (12) Se o senhor vinha [st. viesse] mais cedo aí achava (st. acharia) ele.

【もしあなたがもっと早く来るなら彼に会えるのですが】

これらの例から、次のような対応関係が見て取れる。

(13) 接続法（規範文法）と直説法（話し言葉）の対応関係

接続法現在 → 直説法現在／直説法未来

(例：venham → vêm, faça → vai fazer)

接続法不完全過去 → 直説法不完全過去

(例：conhecesse → conhecia)

接続法複合完全過去 → 直説法完全過去

(例：tenha chegado → chegou)

接続法未来 → 直説法現在

(例：pagar → paga)

接続法現在と接続法未来がともに直説法現在に置き換わるが、これは接続法現在と未来の出現する統語環境は互いに重なり合わない、すなわち「相補分

布」をなしていることによるものであろう。

#### 4.

Wherritt (1978:41- 42)は、会話録音の分析から、教育レベルや年齢にかかわらず、接続法未来が最も高い比率で規範文法が定める通りに使用されており、接続法過去と接続法現在を比較すると、規範文法から逸脱した直説法の使用は（わずかな差ではあるが）過去よりも現在の方に多く見られるという。また接続法の代わりに直説法の使用が多く見られる構文は、命令文、関係節、Se 以外の副詞節であり、名詞節における規範文法からの逸脱は中程度であるとしている。そして Se に導かれる副詞節（条件節）において最も規範文法からの逸脱が少ないという。したがって話し言葉において、接続法の使用率は①Se で導かれる副詞節②名詞節③命令文、関係節、Se 以外の副詞節の順ということになろう。

さらに Wherritt は “Inflection results in redundancy...; therefore all uses of the subjunctive are redundant in that the reservation expressed in the higher clauses and the subjunctive in the lower clauses say the same thing. For native speakers use of the subjunctive is not crucial to meaning after verbs of volition and emotion, in commands, and in adjective clauses.) (Wherritt 1978:43) と述べている。すなわち (14)に見られるように、下位の節（従属節）で動詞が接続法の語形を取るのは、上位の節（主節）の動詞が持つ [+reservation]（下位の節に接続法を引き起こす素性）を具現化したものと分析することができる。

(14) a. Quero que ponha isso lá.

[+reserv.] → ↑ (接続法：余剰的)

b. Quero que põe isso lá.

[+reserv.] → ↑ (直説法：非余剰的)

【それをそこに置いてもらいたい】

このことを言い換えれば、主節の動詞が、下位の節に接続法を引き起こす素性である [+reserv.] を持たない場合は、下位の節には自動的に直説法が出現す

るということである。主節の動詞が[+reserv.]を持つ場合、下位の節内の動詞が接続法の語形を取るということはあくまでも規範文法からの「圧力」によってなされるのであり、規範文法から逸脱して直説法の語形を取っても、意味上は何の支障もないということになろう。

他方、Se で導かれる副詞節（条件節）においては、(15)に見られるように、直説法と接続法の意味上の対立だけでなく、接続法未来と過去という接続法時制の相違によっても意味上の対立が生じる。

- (15) a. Se eu *fizesse* isso 【もしそれをするなら（仮想文、現在の事実の反対）】  
b. Se eu *fizer* isso 【もしそれをするなら（未来の仮定、条件）】  
c. Se eu *faço* isso 【それをするときはいつも（現在の事実、習慣）】  
d. Se eu *fazia* isso 【それをしたときはいつも（過去の事実、習慣）】

## 5.

ここでは(14)で見たような名詞節における接続法の使用は「余剰的」であるという問題を主語・動詞の呼応規則(subject-verb agreement rule)との関連で論じてみよう。

(16)で見るよう、規範文法に従えば、動詞は主語の人称・数に一致しなければならず、いかなる場合（たとえばV S のように動詞が主語に先立つ場合なども）動詞の語形が主語の人称・数を具現化するのは義務的であり、したがって余剰的であると言えよう。（英語の例：I speak, You speak, We speak, They speak と比較すればこの点が明らかになろう。）

- (16) Eu falo 【私は話す 1人称・単数】  
Tu falas 【汝は話す 2人称・単数】  
Ele fala 【彼は話す 3人称・単数】  
Nós falamos 【我々は話す 1人称・複数】  
Vós falais 【汝らは話す 2人称・複数】  
Eles falam 【彼らは話す 3人称・単数】

ブラジルポルトガル語の話し言葉においてはこのような主語・動詞の呼応

規則は義務的ではなく、変異的(variable)であることはよく知られている。  
(Naro & Lemle 1976 など参照) (17)は変異的な呼応の例である。

- (17) a. Eles era grosso, não tinha condições. (st. Eles eram grossos, não tinham condições.) 【彼らは粗野だった、条件を満たしていなかった】  
b. Quando é que chega as visitas? (st. Quando é que chegam as visitas?)  
【お客様たちはいつ来るんだ?】(Azevedo 2005:227)

これらの例は、必ずしも話し手の社会階層や教育レベルによるだけでなく、教育レベルの高い話し手においても場面の形式さの度合いによっては出現する。この点において、本稿で扱っている接続法の問題と同様である。

のことから、主語・動詞の呼応規則の規範文法からの逸脱と本稿で扱っている接続法の用法（特に(14)で見たような名詞節での用法）は相関関係にあるという仮説をたてることができよう。現在、筆者には手元に十分なデータがないので、断定的な結論は下せないが、主語・動詞の呼応の規範文法からの逸脱は接続法の場合より頻度的には高いように思われる。その理由として接続法の出現する文脈がより限定的であるということがまず挙げられよう。また Naro & Lemle は “Agreement is much more probable when the subject precedes its verb, rather than follows it, and is, furthermore, somewhat higher when the subject is deleted or distant.” (Naro & Lemle 1976:229) と述べている。すなわち Eles falam の方が Falam eles より主語・動詞の一致が起こる頻度が高いということである。一見すると、主語が動詞に先行する場合は、主語により人称・数はすでに示されているので、後続の動詞がその語形によって人称・数を再度示すのは余剰的と考えられるが、主語が動詞に先行する場合の方が、後続する場合よりもより「目立つ(salient)」統語環境にあると言えよう。Naro & Lemle が示すように、Eles é (st. são)の方が Eles come (st. comem) より「目立つ」ので、前者の一致の比率の方が高い。このことから(14)で見たように、Quero que ponha isso lá.において従属節の動詞が ponha という接続法の語形を取ることは、たしかに余剰的ではあるが、また同時に規範文法からの逸脱が「目立つ」統語環境と言えるのではないか。

以上、不十分なデータに基づく議論ではあったが、ブラジルポルトガル語の話し言葉の文法的一側面を多少なりとも明らかにできたものと思う。

---

[注]

<sup>1</sup> “It is common knowledge that BV's (= Brazilian Vernacular) conspicuous features define a socially stigmatized linguistic profile that differs considerably from the standard norm taught in schools and used by educated persons (often approximately) in formal contexts. However, educated speakers are often ambivalent about the vernacular, caught as they are between a prescriptive norm based largely on written models, spanning several centuries of literary usage, and a linguistic reality that departs considerably from that ideal model. In a society where literacy and grammaticality of language use are held as the hallmark of education, such ambivalence is inevitable when one is aware that the occurrence of stigmatized features in one's own speech is too spontaneous and frequent to be dismissed as resulting from occasional mistakes or slips of the tongue. It is apparent that rules considered typical of the vernacular are present in the native linguistic repertory of educated speakers, who acquire the standard largely through normative coaching, which includes not only formal school instruction but also pressure from family and peers.” (Azevedo 1989:862)

<sup>2</sup> 同一の統語環境に直説法 (fuma)と接続法 (fume)がともに出現するこの例は、たとえば否定の作用域の問題として、取り扱うことができるであろう。

<sup>3</sup> (4) は規範文法の定める通り、接続法が出現している。(3) は直説法が用いられており、規範文法からは逸脱している。

---

[参考文献]

- Azevedo, Milton M. 1976. *O Subjuntivo em português: um estudo transformacional*. Petrópolis, Vozes
- \_\_\_\_\_ 1989. "Vernacular Features in Educated Speech in Brazilian Portuguese". in *Hispania* 72, December
- \_\_\_\_\_ 2005. *Portuguese: A Linguistic Introduction*. Cambridge, Cambridge University Press
- Naro, Anthony J. and Miriam Lemle. 1976. "Syntactic Diffusion" in *Papers from the Parasession on Diachronic Syntax*. Chicago, Chicago Linguistic Society, 221 - 240
- Perini, Mário A. 1995. *Gramática Descritiva do Português*. São Paulo, Editora Ática
- Wherritt, Irene. 1978. "Patterns of the Subjunctive in Brazilian Portuguese" in *Revista Brasileira de Linguística*, vol.5, No. 2,